

ぶんごHOME



このまちで
踏み出す。
一歩、



いつかアイドルになりたいの。



YouTuber ヘプタゴン活躍中!

チャンネル登録お願いします♪

★ヘプタゴンの新しいチャンネルができました!



🔍 **ヘプタゴン**

作成者後記

豊後大野市地域おこし協力隊の日浅(ひあさ)です。当フリーペーパー『ぶんご HOME』6号を読んでいただき、ありがとうございました。今回は、豊後大野市で新しい一歩を踏み出す方々を紹介させていただきました。お三方それぞれ「自分らしさ」を大切にしながら挑戦しており、そしてその背景には大切な家族や仲間が存在していることに感銘を受けました。この取材を通して、豊後大野市という自然と人の心が豊かなこの地は、一歩踏み出そうとする人にとって「挑戦しやすいまち」だと改めて思いました。

取材を受けてくださった皆様、ご協力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。

私事ですが、地域おこし協力隊の任期も残り2か月となりました。業務の一貫として作成しているこのフリーペーパーも、次回が最終号となります。ぜひ7号も読んでくださいますと幸いです。

豊後大野市役所まちづくり推進課 地域おこし協力隊
日浅紗矢香

ぶんごHOME vol.06

2021年7月発行

発行：豊後大野市役所まちづくり推進課 地域おこし協力隊

発行人：日浅紗矢香

問合先：豊後大野市役所まちづくり推進課

TEL / 0974-22-1001 FAX / 0974-22-3361



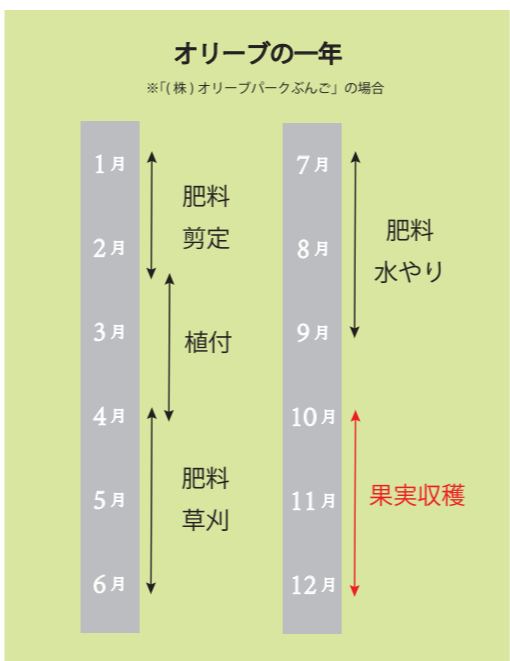
地元でオリーブ油の製造を目指す22歳

阿南雄人さんは、豊後大野市緒方町でオリーブ栽培をしている「(株)オリーブパークぶんご」を父と兄と共に運営し、栽培したオリーブの実を使用したオリーブ油の製造・販売を目指して日々奮闘している。

緒方町出身。地元の高校に進学し、将来の夢を模索していた時に、父の栽培していたオリーブの木に興味を抱いた。「10年前に父が植え始めたオリーブが大きくなくなってきて、家族で油の製造に挑戦してみようか」という話になったんです。僕も『面白そう』と好奇心が湧き、高校を卒業したら地元を出て、産地の小豆島でオリーブについて知識を深めたいと思いました」。

豊後大野市での『油脂製造業』の施設は初であり、雄人さん家族にとっても初挑戦。家族や事業に関わる人々の想いを背負い、雄人さんは高校を卒業後、2年間の研修を受けるため単身で小豆島へと渡った。

「わくわく」の気持ちを募らせながらスタートした小豆島での日々は、手間ひまかけてオリーブを栽培する大変さや楽しさを実感しつつ、観光地としての在り方を目の当たりにし、地元を客観的に見つめなおすきっかけにもなった。



1) 6月の取材時に撮影したオリーブの実 2) 3か月で完成させたという手作りの油製造工場 3) イタリアから輸入したオリーブの実を採取するための機械 4) 手間ひまかけてオリーブを栽培していく

小豆島での修行を経て豊後大野市へ戻った雄人さんは、いよ家族と共にオリーブ油の製造に向けて走り始める。まず取り掛かったのは工場の建設。雄人さんの家族の運営する会社は土木業中心に事業を実施していることもあり、会社のメンバーと共に手作りで建てた工場は設計からわずか4か月足らずで完成した。工場が完成するとすぐにイタリアから搾油機を購入。本格的な機械ではあるものの、細かな調整や加減は人の手と技術が必要となる。来年度からの本格的なオリーブ油製造に向けて、技術を磨く練習と試運転を重ねる日々だ。オリーブは収穫して24時間以内に搾油する必要がある、3〜5キロの果実で製造できるオリーブ油は、わずか150ミリリットルとのことだ。少しずつ本数を増やしながら植え付けしているオリーブの木は、現在500本にまで達しているが、油製造を本格始動する上ではまだまだ足りない数だという。オリーブの木の育成も油製造も、手探り中ではあるが、雄人さんが小豆島で学んだ知識や経験を大切にしながら、本格始

動に向けて、家族と共に確実に前を向いて進んでいる。

家族への尊敬の気持ちが原動力に

「父は思いついたことをすぐ実行に移す人です」そうまっすぐな瞳で雄人さんは話す。「オリーブ栽培をスタートしたのも、工場を建設すると決めたのも、父の一言がきっかけでした。『とりあえずやってみる』という父の挑戦心が、おそらく自分の好奇心を掻き立てて、小豆島へと学びに出る経験に繋がったのだと思います」。

将来の夢について模索していた高校時代、父の栽培するオリーブに魅せられたのは、きっと父の背中にワクワクを感じたからだろう。雄人さんは、共に働く兄にも厚い信頼を寄せている。「兄はとにかく何でもできるんです。ものづくりも仕事もテキパキこなすので、敵わないですね」。家族への尊敬の気持ちが、雄人さんにとって地元での挑戦の原動力になっている。

まちの観光農園としての夢

年々高齢化が進み、もともと田んぼや畑だった場所が維持管理できなくなり「耕作放棄地」が多く目立つようになっていく中、どうにか活用したいと雄人さんは考える。「いま思い描いているのは『体験型の観光農園』づくりです。オリーブ以外にもブルーベリーだったり冬に収穫できる果物を実らせて、たくさんのお客さんに来てほしいと思っています。荒れ果てた土地を『生みだす』土地へと変えて、それに伴った雇用も作り出せる場所をつくっていききたいです」。

オリーブの木は「千年生きる」と言われるくらい、適正に管理をすれば長生きする木。そんなオリーブを筆頭とした「実のなる」木々の広がる美しい農園は、その光景を想像しただけでワクワクしてくる。

10年前に父が栽培をはじめたオリーブ。雄人さんは次の10年をかけて油を製造して地場産品へと進化させ、地域の耕作放棄地を体験型農園として変化させていく。そんな夢を叶えていくため、雄人さんは大きな1歩を踏み出したばかりだ。



緒方町の原尻の滝から車で5分。そこには、そよ風にゆれるオリーブ畑が広がっていた。畑の先にある小高い丘には小さな工場が。新しい木の香りの漂うその工場内はまだガランとしていて、これからはじまる未来への躍進に向けて静かに構えているようだった。

家族の想いを胸にもう一步、前へ。

阿南雄人 (あなんゆうと)

1999年生まれ。大分県立三重総合高等学校を卒業後、香川県小豆島にてオリーブ栽培と加工について2年間修業をする。2019年、豊後大野市へ戻り、オリーブ油の生産に向け家族と共に日々奮闘中。



文化・価値観の差を越えて 「人」に尽くす。

ワークビジョン協同組合 理事長
ひがし かずき
東和毅さん(24)

「外国人技能実習生受入事業」という国の制度がある。開発途上国の人に、母国では習得が難しい技能を日本の企業で習得してもらい、母国へ帰国後に、習得した技能を経済発展に活かしてもらうことを目的とする「国際貢献」のための制度だ。2018年10月、東和毅さんは豊後大野市の三重町で、その制度での組合を立ち上げた。「ワークビジョン協同組合」という名のその組合は、設立して以来、200名もの技能実習生と受け入れ企業の橋渡しをしている。

祖父が導いてくれた経営者への道

東さんは豊後大野市三重町生まれ。小学校の進学と共に引っ越した中津市では高校卒業まで過ごした。本来は高校卒業後に就職を考えていたが、「大学で外の世界を見て広い視野を持つことが人生で大きな勉強になる」という祖父のすすめで、内定していた会社を断り、福岡市の大学の経営学部への進学を目指した。

東さんは、豊後大野市で不動産・土木関係の経営をしている祖父の影響を受け、小学生の時から経営者になることが夢だった。「人に尽くし、周りから慕われ頼りにされている姿を見て、自分も人徳のある祖父のようなリーダーになりたいと憧れたんです」。

そんな尊敬する祖父の一言で決意した大学への進学は無事に叶い、これから待ち受けるたくさんの人との出会いや、経営、

お金についての学びに心を躍らせた。

「本当の幸せ」に気づかせてくれたカンボジアの少女

大学1年生の春休み、東さんは旅先のカンボジアで一人の少女に出会った。決して裕福とは言えない身なりの少女だったが、「将来は村の医者になってみんなを救いたい」とキラキラとした瞳で幸せそうに語った。その姿に心打たれた東さんは、自分の価値観が大きく変化したことを実感した。「それまでは、お金=人の豊かさだと強く感じる自分がいたのですが、より大きな幸せや豊かさは『誰かを想う』気持ちにあるんじゃないかと思うようになりました」。

このことがきっかけとなり、東さんの大学生活は大きく変わった。必要最低限のものだけで充実感を得られるようになり、その分、人と関わる時間が増えていった。日本人学生との交流に踏み出せない留学生を見て、日本語学習や就職のサポートをしたり、日本の「文化」の原点に触れて心を開いてもらおうと「田舎に留学生と行く旅」の企画なども行った。さらには、東さんのそれまでの活動や想いに共感した留学支援会社から協力依頼をされ、九州代表として留学支援の事業化を任せられることにもなった。

そして2018年10月、様々な外国人サポートに携わった経験を活かして、大学在学中に「ワークビジョン協同組合」を立ち上げるに至った。憧れの祖父のような広い視野を持つ経営者として、夢への一步を踏み出した瞬間だった。

＼ 実際どんなことをしている？ ／

組合のサポート体制



日本語と日本のマナーについての学習

日本の企業で働く外国人は、日本とは文化も時間に対する感覚なども異なるため、それが原因で差別や人権問題の被害を受ける例もあるという。主にベトナムからの実習生を多く受け入れている同組合では、ベトナムにも日本語教育施設を配置しつつ、入国した実習生の日本でのマナーから生活習慣についても研修を行う。「お母さん」として実習生から慕われている平中瑞季さん(30)は、日本語教師として語学を指導しながら食事マナーなど細かな生活指導を熱意と愛情を持って実施している。



写真：東さん提供

配属企業との綿密なやり取り

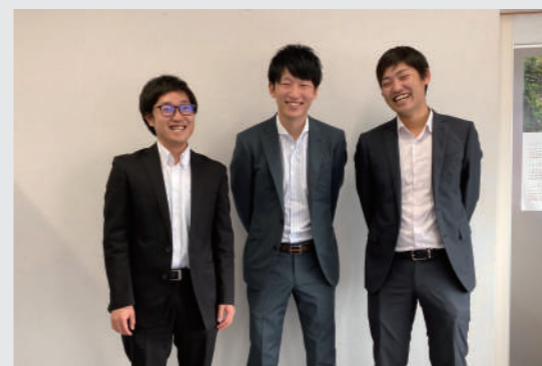
実習生の働く先の企業との関係サポートも、同組合では欠かせない。組合で日本の文化や日常生活マナーなどを学んだ実習生が、実際に日本企業で働く際に困難に直面していないか、企業とのコミュニケーションはとれているかなど、メールや電話のみでなく、実際に現地へ訪問して定期的に確認とサポートを実施している。「日本の第一次産業は多くの外国人が支えてくれている」と熱く話す東さんは、実習生一人ひとりが孤立していたり悩みを抱えてないか常に気配りしつつ、良好な関係づくりに努めてくれる受け入れ企業への感謝も忘れない。



写真：東さん提供

行き場を失った技能実習生たちの駆け込み寺

残念ながら日本には、技能実習生に対して不当な扱いをする企業や、実習生へのケアを怠ったり理不尽な対応をする組合が現在も存在するという。その結果、全国では、年間約7000人もの外国人実習生が行き場を失っているという現状があり、自国にも帰ることができずに不法就労につながっている等の実態があるようだ。東さんはそのような実習生を「家族」として温かく受け入れる駆け込み寺としての活動も行っており、さらに日本の技能実習制度の健全化に向けて発信にも力を入れている。



仲間と共に移住して暮らす

現在、組合で働く9名の従業員のうち半数以上は、福岡、熊本、岡山、神戸など県外から豊後大野市へ移住している。その中で片山雄介さん(写真左)、松永太一さん(写真右)は、立ち上げの頃より共に活動してきた。暑くなってきた最近、仕事が終わると滞泊峡など豊後大野市内の川や渓谷へ遊びに行くほどの仲だ。片山さんと松永さんは、東さんについて「ついでに行きたい尊敬する人」と口を揃える。

24歳、若手経営者である東さんは、これからも多くの外国人技能実習生と日本の企業を繋ぐ架け橋として活躍するだろう。



ハンドメイド雑貨 cobitomo
くろぎ ともみ
黒木 友美 さん

「昔からあまり自分に自信がなくて」。そう、はにかんだ笑顔で話す黒木友美さん（38）が見せてくれた洋服や小物は、どれも柔らかい素材で手触りがよく、柄や形も丸みを帯びたものばかりで、ほっこりと優しい気持ちになる。

2013年、黒木友美さんは夫の転勤で岩手県から家族で豊後大野市へ移住してきた。宮崎県日向市出身で、小さい頃からおしゃれや洋服が大好き。「将来は自分のデザインした洋服が作れるようになりたい。それを沢山のの人に着てもらいたい」と夢を抱くようになった黒木さんは、中学生になるとミシンに挑戦しはじめたが、当時は何度挑戦しても自分の思い通りの洋服が作れず落胆することも多かったという。しかし、夢を諦めることなく高校を卒業して進学したファッション専門学校では、本格的な服飾の勉強に励み、さらにミシンの技術を磨いた。専門学校卒業後は婦人服ブランドの会社へと就職したものの、退職後の結婚、出産と、服飾の仕事に再び就く機会はだんだんと遠のいていった。

しかし、子育ての傍ら、ふと無心になりたいときはやはりミシンの前にいたという黒木さん。その後、宮崎県から岩手県へと夫の転勤で引越しをしたり、日々の家事・育児に追われながらも、その片手間で子どもの服や小物を製作する日々を送っていた。

「自分のペースで無理なく、ワクワクとした気持ちでミシンに向き合う時間が好きなんです。そして、作った洋服や小物を見て家族が喜んでくれる瞬間も幸せですね」。幼き日に描いた「自分の作った洋服を沢山のの人に着ても

らいたい」という夢は、家族のために心を込めて丁寧に作ったオンリーワンの服作りという形で、黒木さんの中であたためられていた。

ところが2013年に豊後大野市へ移住し、九州へ戻ってきた黒木さんに転機が訪れた。車で2時間の距離にある地元、日向市で店をしている家族から「小物の販売をしないか」と声がかかったのだ。数点、その店に商品を置くようになった黒木さんだったが、商品を手にした人が「お気に入り」の一品として買ってくれたり感想をくれたりしたことに大きな喜びを感じるように。

「手作りしたものをお客さんが気に入って買ってくれたと知った時は本当に嬉しくて、また店に商品を置いてもらおうと思ったんです」。

そして、2020年春、三重町にある『里の旅ものがたり館 絵本屋あっそうか!』（以下、里の旅）を訪れた際、ここに幼稚園の入学グッズをはじめとする商品を置きたいと思うようになった。

「たまたま生活圏内に里の旅があったのですが、運転が苦手な私なので、駐車場がしっかりあったり、店内も広さがあったりと、私にとってもとても助かる環境だと思ったんです」。

声をかけるのはとても勇気がいったという黒木さんだったが、子育て世代が多く訪れ、移住者や観光客のサポートをしている里の旅のスタッフは快諾してくれたという。当時、新型コロナウイルスの影響でマスクが不足していたこともあり、手作りマスクを購入する人が多く、黒木さんの商品は多くの人が手にとるようになっていった。

また、黒木さんの商品を見た幼稚園のママ友が話しかけてくれたりと、ものづくりを通じて地域の人との会話や知り合いが増えたという。

そして黒木さんの商品をもっと多くの人に見てもらいたいとの思いで、里の旅のスタッフが、SNSでのPRや、ハンドメイド雑貨のブランド名『cobitomo』の命名などを共に考案してくれた。「豊後大野市内で頑張るお母さんたちや移住された方だったり、いろんな方と繋がることができました。思い切って里の旅に商品を持ち込みに行けて良かったなと思いました」。

知り合いのいない移住地。ここで道を切り開くことができたのは、ハンドメイドを通して勇気を一歩踏み出したからだ。そしてそこでの出会いからさらに繋がりが生まれ、どんどんと知り合いの輪が増えていった。

「自分のペースで無理なく、ワクワクの範囲で」というスタンスで製作された黒木さんのハンドメイドの洋服や小物は、今後も地域の主婦や子どもたち、転入してきた人々を勇気づけ、癒す存在となっていくことだろう。

そんな黒木さんの今の夢は、「おばあちゃんになるまで、ミシンを使ってものづくりができること」。小さい頃に描いた、「自分の作った洋服を沢山のの人に着てもらいたい」という大きな夢は、このまちで、母として、地域の一員として、目の前の大切な人たちを癒す丁寧なものづくりへとしっかりと形になっていた。

cobitomo
(コビトモ)
2020年にハンドメイド雑貨の販売としてスタート。3児の母としての目線で作る黒木さんの商品は、主婦を中心に人気を集める。子ども用の服や幼稚園グッズ、ポーチやエコバッグをはじめ、オーダー品の小物類を作成。“無理なく自分のペースで、自分らしく”を大切にしている。



襟元がふんわりと丸く、柔らかい綿ローン素材の大人用ブラウス。爽やかな柄と透け感があって、身に着けるだけで軽やかな気持ちになりそう。



子ども用の甚平。布はWガーゼの素材で柔らかく、ひんやりと心地良い。袖口が広くて動きやすく、汗が乾きやすい素材でもあるため、暑い夏でも快適に過ごせそう。

綿素材の子ども用上着。キルティング生地で、ふかふかとしていて柔らかく気持ちいい。



リュック型の小物入れ。手のひらサイズなのに、しっかりと蓋ができて、ランドセル等にも取り付けることができるので、子どもたちも大喜び。何を入れるかは自分次第で、ワクワクする。

里の旅ものがたり館 絵本屋あっそうか!



登録文化財の建物を使った観光拠点、「ぶんご大野里の旅公社」内にある絵本館。常時1000タイトル以上の絵本が並び、授乳室など子連れでも気兼ねなく利用できるサービスが充実している。2階の企画展コーナーでは、様々なイベント等を実施している。

問い合わせ
一般社団法人ぶんご大野里の旅公社
住所：豊後大野市三重町市場1090
電話：0974-27-4215
メール：info@sato-no-tabijp

その他『cobitomo』の作品は Instagram にて♪
※下図のQRコードよりリンクへと飛べます。



@cobitomo